

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別換承認雜誌第三五二號
昭和三十年四月二十五日印刷
昭和三十年五月二十五日發行

第二十一卷

五月號

淨土



五月號

イヌ



家を出て比叡山に向われる若き日の法然上人（増上寺・國寶法然上人繪卷より）

浄土 五月號 目次

卷頭言……………(1)	宗教入門 (1)……………佐藤賢順…(6)
静風楚々……………吉田絃二郎…(2)	宗教人ハ イライト 大愚良寛さま ……………新保義道…(12)
人情記者の手帖から ……………山崎安雄…(18)	書評……………(22)
法の華咲く善光寺…丸山幽水…(23)	芝園だより……………(表3)
史話 新島守……………鶴田湛泉…(27)	表紙……………松濤達文



言 頭 卷

一つ路をふたりにて往くことなけれ

先頃の地方選挙に見られた風ですが、二三人連れの挺身隊が他地區に潜入して手蔓をたくつて票かせぎをしたことです。一つには協力もでき連絡もつくからですが、一つには脱落や怠慢、反逆の防止にもなるからで、とにかく人は依頼心が強く、まあ自分一人位はという油断も起り易い。中には味方の風をして反対派の運動もこそそとやりかねない。その反面、二人連れ立てば心強くもあり、仕事もはづむというものである。

しかるに、このマハーバガという原始佛典の言葉は、敢然として、一つ路を二人で往くな、と叫んでおります。何という自信に満ちた言葉でしうか。まことに熱と力にあふれた言葉であります。全員があらゆる方面に手分けして立ちあがり、それぞれの持場、立場に於て、佛の光を輝かすことです。そこに眞の傳道があり、生命の輝きがあります。

二三年位前でしたか、「我が道を往く」という映畫が、人々の共感を呼んだことでした。何事にせよ毀譽褒貶にとらわれず、失敗に屈せず、己れの道をまつしぐらにつき進むのが、人生の大道であるべきに、それぞれ仲々貫き難い世の中です。それには強い信仰の支えがなくてはなりません。巡禮は同行二人と書いた笠をかぶります。お大師様と、觀音様といつも一緒だという心が、彼等の足を力づけています。私たちもみ佛に支えられて、己れ一人の道を、覺束なくとも進みましょう。(中村康隆)



静風楚々

吉田絃二郎

今年は花にさきだつ七八日ころ俄かに病院に入つたので裏の畑の花さえも見なかつた。それに病院も焼けた跡に建てられていたし、見わたすかぎりの家々までが焼野が原のなかに新らしくつくられたものであつたので、どこにも一本の櫻も見えなかつた。たゞ一軒焼け残りの家があり、そこの狭い庭に桃の花が咲いていた。

花のさかりの日は病院の若い人々も村山貯水池の花を見に行つて、酔いどれの多かつたことやひどく電車のこんだことなどを語つていた。

その次の日ははげしい風雨で、花は未練もなく散つたであらうなどと考えながら、わたくしは花なき東京の街をながめた。

それでも二三日つゞいて花見へ行つた人々が、夜になつて病室の窓の下を、わめきつゝ通り過

ぎて行つた。

わたくしのように二十日足らずの病院生活者さえ、窓の下の花見客のざわめきには心を動かされるのであるから、一年二年、さらに十年と病院生活を送っている人たちはどんなであらう。並べられたベッドの上に石のように静かに寝ている人たちを見れば、何ともいえないさびしいものが胸に迫る。

若い娘さんが終日ベッドに寝ている。日暮れころになればその母親がどこぞの勤め先から病室にかえつて来て、夜の支度をして、母と子は一日の最善の時を持つのである。たゞ、一つのベッドに母と子はねむる。朝になれば母は子のために食事の準備をととのえ、自分は勤め先きに急ぐのである。母がかえるまで娘は母を待ちつゝベッドに横たわっている。

あの人たちはついにこの春の花も見ないで病室に望みなき望みを描きつゝ臥せっている。

あの人たちからわづか十尺か二十尺をへだてゝ花見をたのしみに歩いてゆく人たちは、はたして百人に一人でも、往來から病室の窓を見上げてそこにベッドの上に苦しんでいる人たちのことを心に描いたことがあるか。恥づかしながら、わたくし自身、一度病院を出てしまうと、今もなおそこに横たわっているであらう人々を思いやる心は日毎に薄らいでゆく。

わたくしは妻が亡くなる二三日前、或る大學附屬の病院で見た現實の姿を今日なお忘れることができない。毎朝病院長は五六人のお弟子たちを引きつれて廻診に見えた。

或る朝院長は妻の診察をした。わたくしは全神経を尖らして院長の顔にあらわれるすべての表情の底にひそむものを掬み探ろうとした。わたくしにとつては尊い人間の生命に關することであつた。わたくしにとつては生きるか死ぬるかの眞劍勝負である。ちようどその時、院長の後ろに立つていた一人のお弟子があくびをしたのであつた。

わたくしにとつては生死を賭けた重大事件であつたが、お弟子にとつては生と死の問題はたゞ科學的事實にすぎなかつた。お弟子の一人があくびをしたことをとがめ立てすることはできない。しかし自分の妻子を失つた者の身にとつては腹立たしいことである。自分を第三者の立場に置いて考ゆれば世間的にありがちなことであるが、凡夫の感情はなかなかそう簡單には割り切れない。

今年は春の病院生活のために多磨川の田圃の芦の葉も見ず、行々子の鳴く音も聽かなかつた。行々子が鳴くところになれば、すでに初夏の色が濃く、日にかゞやく雲の峰がもくもくとして青空に湧き立つ。

年々にせばめられてゆく多磨の田圃にもまだ水鶏が巢喰うている水田があるが、そのあたりにたがやしている人たちも水鶏には氣づかない。これから後幾年水鶏が多磨の田圃に巢喰うだろうかと思えば心細い。

誰れがいつごろ植えたのであろう。多磨の田圃を見おろす丘のあたりに毎年初夏になればアカシヤの花が咲いていた。アカシヤの花は楚々として咲き、寂然として散つてゆく。アカシヤの花を見ればかつて北國に旅したところ右手に佐渡ヶ島を波の上に見つゝ、左手に白山の雪をながめつゝ、たどつていつた旅を思う。糸魚川に晩年を靜かに送つておられた相馬御風さんをはじめ、そこで逢つた人たちの自ら佛教的な人生の生き方を尊く思つたことであつた。

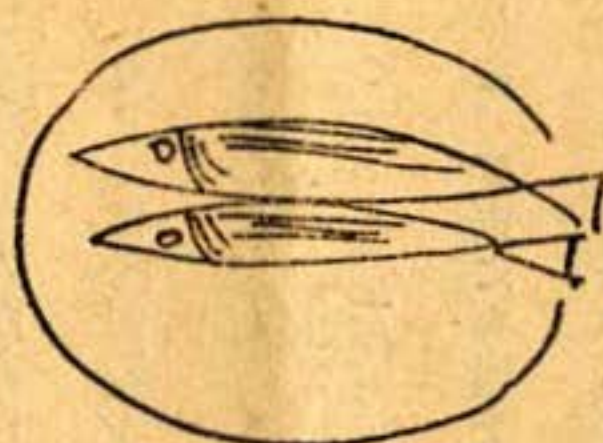
そこには十尺の十一面觀世音を刻んでゐる彫刻家があつた。それは今から四十餘年も前、東京の根岸の里でわたくしと隣り合はせて住んでゐたY氏であつた。Y氏もすでに數人の孫の祖父となつてゐた。「佛さまを刻んでこのまゝ死んでゆけば悔ることなし」といつて無鑑査の腕を持ちながら、東京にも出ずアカシヤの花の下に黙々として、念佛申しては悟り切つた姿を見せてゐた。

さらになお一人のS氏は闘病五年念佛を唱えながら子供のようになおな心を持ちつゞけて彌彦山をながめて地藏堂の故郷の家で永眠した。

地藏堂といへば良寛さまが渡し守に意地悪をされて、舟から水の中に突きとばされ、從容として水のなかに合掌しておられた。さすがの惡船頭も後悔して良寛さまを水から救い上げた。良寛さまは丁寧に、渡し守に禮をいつて、村の方へあるいてゆかれたという傳説の残つてゐる村である。

若い人達に語る

宗教入門 (第一講)



佐藤 賢 順

偽りの宗教と眞の宗教

宗教とは何か、ということとはふだんお互がよく解つてい
るような氣がしているけれども、さて改まつて問われてみ
ると、それに答えるのは必ずしも易しい事ではありませ

ん。解つていと思つてい
るのは、かつて學校で教え
られたり本で讀んだりした
宗教に關する知識であつ
て、自分がほんとうにわが
物としている宗教ではない
でしょう。まして何が正し
い宗教であり、何が偽りの
宗教であるか、となると、問
題はいよいよ難しくなりま
す。そこで私は今まで教わ
つたり讀んだりした宗教に
關する知識——宗教學とか
宗乘學とか教義學とかいふ
學問——を一應棚上げて
直接に自分の心を反省して
みたり、世の中の現状を眺
めたりして、宗教とはどん
ものかを考えてみようと思
うのです。傳統的に與えら
れる宗乘學とか教義學とか
いふものは、勿論、疎かに
することできないもので、
結局は自然、その線に沿
うて考へてゆくことになる
のですが、生のままの宗教
を求めめるためにはそ
ういふ學問は却つて邪魔
になりますので、今は暫く

括弧に入れておきましょう。

私の心の中には、何か一般の日常の物の考え方とは違つた、日常の考え方では満足のできない考え方がありはしないでしょうか。職場で生産にいらしたり事務所で傳票や帳簿の整理をしたり、取引きをして利益をあげたり、家庭で團欒し休養したり、友人や親戚と交際したり、喫茶店で休んだり映畫を見て娛んだりする生活はお互の日常の生活ですが、時にはそういう生活と違つた方向を求める心持がありはしないでしょうか。あくせくする日常に飽き足らなくて、何かしらそれ以上のことを求めている心持がありはしないでしょうか。人間以上のものを求めようとか、日常の自己以上の本來の自己を探すとか、移ろい易いこの現實を超えたりいつまでも變らない常住の世界に生きて心のほんとうの安らぎを得たいとか、偽りや悪や憎しみに満たされたこの世の中よりはもつと住みよい、眞實と正義と愛の世界に生きたいとか、その時その時によつて、欣い求める内容にはそれぞれの相違がありますが、日常の生活に飽き足らず、超現世的なものを求めていこうとする點では、共通した方向に向つています。それは科學や經濟や政治の場合とは違つた、また藝術や道德とも異つた心の持ちようでありまして宗教心とでもいふべき心持です、どんな人でも心の奥底には必ずこういう心持が潜んでゐるのです。

現實の生活にはいろいろな矛盾があります。人間が願ひ求めている事とは凡そ逆な結果が現れてくることは珍らしくありません。いつまでも若く美しくありたいと願つてゐるのに、老いと醜さとは容赦なしにやつてくる。健康で長生きしたいと願わぬ者はないのに、病魔は遠慮會釋なく襲つてくる。愛しい人とは別れ、憎い仇敵とはめぐり會う。これらはみな人生における矛盾であります。また信頼してゐた友人に背かれるとか、信用してゐた取引き先が破産して莫大な損害を受けるとかいうことが次々に起ります。こういう現實の矛盾や人生の不信に出會う度に、人間の心の奥に潜む宗教心は目醒めて、信頼の對象を世俗的なものから世俗を超えたものへと置き換えずにはゐられなくなるのであります。これが宗教的な生き方であります。

昔、聖徳太子は、「世間虚偽、唯佛是真」という一句で端的に宗教的な生き方を表わしました。世間は虚偽にしてただ佛のみ眞なり、虚偽とは虚偽といふことで、現實の世俗的なことはすべて虚偽であつて、現實を超えた絶對の世界こそ眞實である、といふのであります。

日常の生活に飽き足らない、現實に不満を抱くといつても、それにまた種々様々な不満の持ち方があるでしょう。今の不自由や質素な暮らしに満足できず、あれも欲しい、これも欲しい、あそこへも行きたい、これも見たい、あれも買いたい、これも食べたい、という不満の持ち方もあるで

しよう。また今のような貧乏はいやだ、お金を溜めて、何億、何十億の富を誇つてやりたいという欲望を持つ人もあるでしょう。或は社會的に高い地位を得、名聲を博して、故郷に錦を飾りたいという願望を持つ人もあるでしょう。望みや欲のない人は一人もないのですし、もしそういう人があるとするれば、それは向上心もなく従つて勤勞とか研究とかの意欲もない怠け者になつてしまつて、少しも世の中の爲にはならない人となるでしょうから、欲望を持つのは大切なことです。が、然しそれは私の食りを満たすための欲であつて、他を苦しめてでも自分の廻りに金を集めたいとか人を踏み超えてでも出世をしたいとかいふのであるとすれば、たとえ現實に満足せず現實を突き抜けようとしてゐるとはいえ、それは宗教ではないのであります。欲は我欲であつてはなりません。自分本位であつてはなりません。我欲から我の字を取り除いて、欲とか願ひとか望みとかいふ心を、正しく清々しい方向へ導いていくことが大切なのであります。宗教とはこのように欲望、願望から、自我中心、自分本位という食りを次第に取り除いて、我欲でなく、大欲、大望、大願を育てていくことなのであります。大願とは何ぞや。自分だけが心安らかに楽しく生きるだけでなく、他の多くの人達とも一しよに楽しく心安らかに生きていこうという願ひであります。社會は一面から見れば、策謀と邪惡と鬭争の、食うか食われるかの世界であ

りますが、しかしその底から清純な泉のように、正義と親切が湧き出ております。恰も私どもの日常の食りの心の底に、清々しい宗教心が潜んでゐるのと同様に、社會の片隅には、愛の泉が湧き出てゐるのであります。人間性に對する深い愛情、これが宗教であります。

一應、宗教をこのように定めておいて、さてそこで、偽りの宗教とは何か、眞の宗教とは何か、という問題にすすみましょう。

現實的なものに飽き足らず、信する相手を世俗的なものから超世俗的なものに移すことが宗教であるといひましたが、それにもいろいろな場合があります。まず第一に擧げられるのは、神佛の力にすがつて病氣を直してもらおうという場合です。長い間の患ひであちらの醫者へこちらの病院へと、通つてゐるのだが、一向に驗が見えず、氣もクサクサしてゐる所へ、その病氣にはあそこの神様が利くとか知り合ひの人から勧められて、醫者も藥もなげ捨ててお札やお水にとつてしまふ、ということはありません。相當に科學的な教養のある人でも、長い病氣で氣の弱くなつてゐる時には、誘われるままにいつい信仰で病氣を治そうという氣になるので、このわらをも掴む氣持は無理もないことです。勿論、病氣の人が信仰にはいるということは大切なことです。動搖する心を信仰によつて平靜に保ち、安らか

に療養することができずし、心が安らかであれば、病氣の恢復も早いのですから、病人に宗教は何よりも大切です。そして人間以上の力の存在を確信し、それに一切を任せるといふのは、眞實の宗教者の歩む姿で、誠に尊いことです。しかしそのために醫者もいらぬ、藥も利かぬといつて近代醫學の成果を輕蔑したり無視したりして、お札やお水にばかり頼るのは迷信であることはいふまでもありません。近代醫學の進歩は實に驚嘆すべき結果を示しているので、ペニシリンとか、マイシンとかいう新發見の藥の一つを例にとつてみても、年々この藥が何十萬、何百萬という多くの人命を救つてゐるではありませんか。病氣の時神佛に頼る、ということには、眞實の宗教心の芽ばえがあるのです。これを丈夫に育てようではありませんか。但し南無妙法蓮華經を唱えればどんな病氣も治る、と思つてカチカチやつてゐる連中には、日蓮聖人の次の言葉を教へてあげたい。「夫れ人に二病あり。一には身の病、この病は耆婆、偏鵲等の方藥をもつて此れを治す。二には心の病、所謂、三毒乃至八萬四千の病なり。佛にあらざれば二天三仙も治し難し。」(中務三郎左衛門殿御返事) 耆婆は印度の名醫、偏鵲は支那の名醫です。身體の病氣は醫者と藥で治すより方法はない。心の病氣は佛でなければ治らないといふのであります。

勿論、科學・醫術は完全ではないから、醫者の藥で治ら

ない病氣はまだ澤山あります。それが信心したために治つたように見えることは時々ありますが、それは實は科學がまだ發見できない理由で治つただけのこととして、決して信心で治つたのではないのです。もし醫學が完全に發達すれば、世の中からは病で苦しみ病で死ぬといふことはなくなつて、人間は、秋になつて木の葉が枯れて自ら落ちていくように、天壽を全うして自然に死ぬ、といふことになるでしょう。自然死が醫學の目標であります。

病氣治しという目的よりは、もつと多いのはお金儲けを目的にして信心にはいる場合であります。世の中がよくなるようにとか、立身出世をして社會的な名譽が得られるようにとかいつて神佛に祈願する人も少くないでしょう。こういう目的は一口に現世利益といいますが、神佛には専ら現世利益を賣物にしてゐるものが澤山あつて、それがまた人間性の弱みを衝いてゐるところから、素晴らしく繁盛しているのです。誰だつていつまでも貧乏でゐるよりは金持ちになる方を喜ぶのはきまつたことで、社會の缺陷や政治の貧困が原因となつて現われてくる貧乏に甘んじてゐることは、一種の不道德でさえあります。この原因は大衆の協力で取除かなければなりません。長い間の貧乏には飽き飽きした、早く人間並みの生活がしたいといふ憧れは、社會人として當然の憧れでありまして、かつて東洋の思想が教

えたような、諦めとか知足とかいふ消極的な人世觀が現代でもなお常に價值があるとはいえません。豊かに生産し充分に消費する經濟生活の方が現代では自分だけにとつてばかりでなく社會的にも意義があるでしょう。しかし何としても金儲けは宗教の直接の目的ではありません。

確かに戦後は數十年前に比べて大衆の欲望は、感覺的にも精神的にも、豊かに満足されているといえるでしょう。大衆は貧乏に甘んじてあきらめているのではなく、要求する權利、主張する權利を與えられています。今まで小作人であつた農民は、少しではあるがともかくも農地を自分のものとして持つことができるようになり、勤勞者の生活は年々ペースアップされています。そういう點で世の中はだんだん良くなつていくことは確かであります。しかしもし欲望の充足や金儲けが欲望のための欲望であつたり、自己の貪りのためには他人を犠牲にしても顧みないといふのであるとすれば、それは考えなければなりません。自己本位の欲望には限りがないのです、これでもう満足だという限界がないのです。一つが満たされればすぐ次の欲望が頭を擡げそれが満たされれば——いやそれがまだ叶えられないうちに、といった方がよい——また次が湧き上つてきます。人間のこの飽くことのない欲望を、明治の高僧、行誠上人はこう歌つています。

あればまたなきを數えて世の人の足れりと思ふ時やな

からん

我欲を満たすことだけを目的として欲望から欲望へと追い立てられていく結果はどうなるか。行誠はまたこうも誠めております。

天が下みなわが物となれるにも猶ものたらぬ心地こそすれ

ところで富や名譽を目的として神佛に祈願する場合はどうなるかといえますと、昨日はあちらの神様、今日はこちらの觀音様、明日は向うの地藏様というように、勝手な願をかけて、それが叶えられなければ、あの觀音様はききめがないとか、向うの地藏様の方が御利益があるかもしれないといふことになつて、あつちこつちの神佛を渡り歩くのです。信賴するに足りる依り所を得る、ということが宗教の目的であるのに、こちらの神に見かぎりをつけてあちらの佛に移りそれもまた信じられなくなつて他の佛に走るといふのは、現實の人間社會に對する關係を、そのまま宗教の世界へ持ち込んだだけで、實はそれは宗教ではないのであります。といいますのは、現實の相對的な事柄を相手としていのですから、科學や經濟や政治と同じ水準にあるわけで、少しもそれを超え出でてはいないからであります。

病氣平癒とか家内安全とか商賣繁盛とか、それだけを目的としたいわゆる現世利益に對して日蓮はまたこう言つて

います。「日蓮は若きより、^{こんじょう}今生の祈りなし。ただ佛にならんとするばかりなり」(四條金吾殿御返事)。若い時から今生の祈り、即ち現世利益を祈つたことがない、というのは宗教の誤つた在り方を批判したものです。

ではここで、今まで述べましたことを纏めて何が迷信であり何が正信であるか、を明らかにしましょう。私は二つの標準によつてこれを區別したいと思います。まず第一は現代の自然科学の成果と矛盾したり、これに反対したりする宗教は明らかに迷信であります。迷信が悪いことは、知識を輕蔑する結果、社會にいろいろな害毒を流すからであつて、醫者にかからず藥を飲まず、護符やお水で病氣を治そうとしたり、肥料はいらぬ、肥料などやつて神の肌である大地を汚すから神の怒りに觸れて饑饉や凶作がくる、などという信仰が、社會に與える實害は、戰慄すべきほどであります。高度に發達した宗教は、いずれも理性・知識を信仰と調和させ、つねに理性で厳しく信仰を磨いております。尤も俗間には迷信というほどにも足らぬ俗信があつて害惡を流さない他愛ないものがありますが、そんなのは放つて置いても差支えはないでしょう。

第二は、自分本位の欲望の満足を目的とする宗教は迷信といわなければなりません。長い歴史の批判に堪えて、文化的に洗煉されてきて宗教——特に佛教やキリスト教のよ

うな世界宗教は、我欲の克服、否定の教え、自己犠牲の教えであります。もし我欲を満たすのが宗教であるとすればその社會に對する實害もまた恐るべきであります。自我中心の欲望を超克し純化し、それを轉機として大きな願望に生きる、深い人間愛によつて、自らも他人も共に濟われるような世の中を作りたいと願う、理想が純粹な愛情を通して實踐となつて現われる——。これが正しい宗教であります。(NSBよりの連續五回放送の要旨) (正大教授)(つづく)

F.F.D.特選幻燈機(荷造送料500圓)

14,500 圓	マスター S 300 100V 300W
24,800	マスター・ルツクス 100V 500W 冷却裝置付
16,500	エルモ 100V 300W
14,500	ニコレット C 型 100V 300W
48,000	デラックス 75V 750W

本會代理取次

會員にかぎり一割引にて、御取次致します。一報カ
タログ送ります。

宗 教 人

ハイライト

大愚良寛さま

新 保 義 道

は し が き

大乘相應の地、佛法の花咲いた日本には、古來澤山の立派な坊さんを生んでいる。宗教的には勿論、文化的、政治的と各方面に偉れた聖者の多い中にあつて、人々に最も親まれ、懐しがられているのは良寛さんであろう。別に取立てゝ言うような仕事もしない。平々凡々の一介の田舎坊さんが、百數十年後の今日に至るまで、尙「良寛さん」「良寛さま」の愛稱で呼ばれ、慕われている。

人は生れつきのまゝの純な心を持ち續けることはなかゝゝむつか

しい、成長するに従つて、何時の間にか道德とか、法律とか、宗教とか、習俗とか何や彼やと歪められ、型にはめられ、環境に支配された泥んこの汚い人間になつてしまつてゐる。又利害打算を眞先に考えて上手にウソをつく人ばかりの間にあつて、天真らんまん、ウソをつかぬ、自分がウソをつかないばかりか他人も亦ウソをつかぬと思つてゐた人が良寛さんであつた。七十四才で此の世を去る迄、子供の如く邪氣のなかつた人である。無心の子供が誰からも愛されるように、良寛さんは何時までも人々から愛され慕われてゆくであらう。

生ひ立ち

良寛さんは佐渡が島に相對する越後（新潟縣）出雲崎の山本家の長男として、寶曆八年（一七五八）十二月生れ、幼名を榮藏、元服して文考と名乗った。山本家は橘諸兄を遠祖とする名家で代々名主と神職とを兼ねていた。良寛さんの父左門泰雄（俳號以南）は神職にたづさわつていたとは言ふものの、夫婦共に佛教の信者であつたらしい。良寛さんの外に妹と弟が出家していることをみても、佛縁の家であつたと言ふことがわかる。

幼少年時代の良寛さんは、名主の跡取り息子として何不自由なく育てられた。彼は學問は好きで、和漢の學をおさめたが、その日常は普通人と異つていた。ひどい無口でめつたに人と口をきかない、家に居る時は何時も一人で部屋にとじこもり、塾への往復等は髪は亂れ、襟は曲り、とけた帶もずる／＼引きずりながら、人が聲をかけても氣づかぬことが多かつたので、町の人々は「名主の晝行燈息子」とあだ名して嘲り笑つた程であつた。安永二年榮藏十六才の時元服して文考と名を改め、名主見習役をつとめるようになった。

黙り屋で交際嫌いの文考も、不思議に盆踊りだけは大好きであり又非常に上手であつた。安永四年七月十七日夜、出雲崎では盛んな盆踊りが催されていた。文考は町の踊り場に行き老若男女に交つて夜の明けるまで「おけさ節」に合せて踊り、十八日朝は何に感じた

のか家には歸らず、そのまゝ尼瀬町の曹洞宗の光照寺に行つて、住職破了和尚の剃度を受けて出家し、自ら良寛と名乗り大愚と號したのである。

修行時代

世の多くの人は良寛と言へば、天性の樂天家であり、洒脱した乞食僧であるかのように思い勝であるが、天性もさることながら、二十數年の血のにじむような修行と勉學の結果、ものにこだわらない天真な心で、自由自在の境涯に至りつくことが出來たのである。

光照寺に於ける良寛さんは僧侶としての本務はつくしたではあるが、名主の若檀那として手荒い修行はしなかつたらしい。足掛け五年をこの寺で過した良寛さんは、北陸地方の巡錫の途中、しばらく留まれた備中玉島圓通寺の國仙和尚に従つて、圓通寺に赴いて修行することになった、時に年二十二才であつた。

圓通寺は中國地方に於ける曹洞宗の名刹であり、「一に石を曳き、二に土を運ぶ」と言う嚴格な寺風である。こゝで禪僧としての種々の作務に従うばかりか、山に入つて薪を取つたり、米をつき、或は耕作をしたり、凡ゆる勞務をもつとめ、其の間は近郷の托鉢をし、勉學にもいそしむと言う生活であつた。師の國仙和尚より宗祖道元禪師の「正法眼藏」の提唱もうけ、更に中國、四國地方を行脚されたのである。天明三年母が歿した時は丁度この長途の行脚中のこと

で、母の死をも知らず遂に歸國していない。師の國仙和尚の歿後はその法統を繼いだ玄透和尚を助けて寺務にあたつたり、行脚に行つたりして修行に勵んだ。この圓通寺にある間に、書に、詩に、歌にすでに一家をなしつゝあつたのである。

父の死と歸國

父の以南は諸國の勤皇の志士と交り、王政復古の運動に活躍していたが、幕府の志士に對する壓迫は甚しく身の危険をも感ずるようになった。他の同志は諸方に遁れ隠れたが、以南は重い脚氣の爲遁れることも出来ず、寛政七年（一七九五）七月二十五日、自ら著した「天真錄」を抱き

朝ぎりに一段ひくしねむの花

夜の霜身のなるはてやつたよりも

の辭世の句を遺して六十才を一期として、落西桂川に身を投じたのである。圓通寺に於てこの悲報に接した良寛さんは、急ぎ旅裝をとゝのえて京都へ向い、亡父の知人に會つて前後の事情をきゝ、遺品を渡されたのである。良寛さんは辭世を認めた遺品の半折のはしに朝ぎりの中にましますものならば

晴るるまにまにうれしからまし

の歌を書きつけ、肌身離さず持つていたと言うことである。それより一路故郷に向つたのであるが、それは實に出國以來十七年ぶりの

ことである。出雲崎に至り生家の門前に佇んだ時大きな邸宅は昔日の繁榮の面影もなく荒れ果て、今は父の姿も母の影もない。

來て見ればわがふるさは荒れにけり

庭も籬も落葉のみして

良寛さんは生家に立ち入らず、家人にも會わず、飄然として去つたと伝えられている。それより一寺の住職ともならず、諸所を轉々として一所不住の托鉢行乞の生活が始まつた。

五合菴時代

國上山の中腹に五合菴と言う小さな菴室があつた、良寛さんは國上寺の厚意によつてこゝに移り住むようになったのは越後へ歸つてから十年目である。其處ではじめて良寛さん本來の生活がはじまつたと言つてよい。今までの宿無しの良寛さんも遂に落ちつく所を得たのである。

索々たる五合菴 空は懸磬の如く然り

戶外杉千株 壁上偈數篇

釜中時に塵あり 甌裏さらに烟なし

唯東村の奥あり 時に敲く月下の門

の話の如く簡素を極めたものである。一個のすり鉢をもつて米をとぎ、味噌をすり顔を洗い、足をすゝいだと言う。雨の日は歌を詠み習字につとめ、讀書に親しみ、晴れた日は食物が乏しくなると村に

出て托鉢（乞食）をして歩き、貰いものが余ると困つた人達に與え足らなければ足らぬよう、あればあるよう、無ければ無いまゝの暮しを續けた。

焚くほどは風がもてくる落葉かな

此の句については一つの傳説がある。長岡藩主の牧野忠精侯が良寛さんの徳風を慕うの餘り、自分の城下に迎えて優遇したいとの申出に對し、徐ろに筆をとつて辭退した一句がこれであつたと言われている傳説はとにかく、清貧の日々、足ることを知つて貧ることを知らない良寛さんの心がうかがわれる。

托鉢のついでには子供等と遊び、遊女屋に出かけてひまな遊女とおハジキをして遊んでいたとも言ふ。

霞立つ長き春日を子供等と

手まりつきつゝ今日もくらしつ

こどもらと手まりつきつゝ此の里に

遊ぶ春日はくれずともよし

子供等と楽しく遊んでいたのに春の日が西の山の端にかたむけば子供が夫々家へ歸り、自分の一人淋しく草庵に歸らねばならぬ「春日くれずともよし」と、童心的哀傷が思われる。

或日良寛さんが四五人の子供とかくれんぼをして遊んでいる時、

良寛さんが薪小屋の中で息をころしてかくれている間に、子供達はコッソリ相談をして良寛さんをおいて逃げてしまつた。それも知らず夕暮まで辛棒づよくかくれていて、夕方薪を出しに來た家人が聲をかけると

「そんな大きな聲を出しなさんな、鬼にわかつてしまふじやないか」

と小聲で言う良寛さんでした。

踊りの好きな良寛さんは、盆踊りの夜は老の身を忘れてわざ／＼山の草庵から麓の里へ下りてゆく、僧侶としてはしにくいことであるが、それを世間態などにこだわらず、踊に夢中になれる良寛さんであつた。或る時手拭を姉さんかむりにして女の衣裳を着て、踊の輪に加わつた。すると或る馴れた老人がそれを良寛さんと知つて、わざと聞えよがしに

「この姉さん、ばかに品がよいぞ、どこの姉さんかいな」

と言うと、それを眞ともうけて一段と得意になつて踊りつづけたとのことである。

このようにしたい放題、我まゝ勝手に振舞つていくつたくなさそうな生活の中にも

何故に家を出でしと折ふしは

心に恥じよ墨染の衣

と、反省の日を送つて居られたのである。併し、法を説いたり説教をしたりしない。他に對して訓戒もしない、だが

「良寛さまがおいになつて一泊された去られたあとは、四五日の間は家の中は上下和合していゝ氣持になる」と言われていた。

良寛さんが出家された後、家を相續した弟由之に馬之助と言う子があり、この馬之助は道樂をして金錢を湯水の如く使うので、之に

困りはてた由之は、兄の良寛さんに意見を頼んだ。頼まれ、ば断わるわけにもゆかず、殊に肉親の間柄であつてみれば尙更、そこで良寛さんは久し振りに我家の敷居をまたいだ。ところが三日間も家に居りながら、息子には一言の意見もせぬ、そして三日目の朝になつて「わしは歸る」と言い出した。由之は變に思つた。意見を頼んだのに一言も言わずに黙つて歸つてゆこうとする兄良寛さんの様子を不審に思つた。旅装をして玄關に出た良寛さんは何を思つたのか、「ちよつと馬之助を呼んで呉れ」と言い出した。そこへ息子が現れたので、「すまんが、わしの草鞋の紐を結んでくれ」と言つた。馬之助は何心なく伯父良寛さんの草鞋の紐を結んでみると、自分の手の甲にあつたものがボトリと落ちてきた、ハッとして伯父の顔を見上げると眼には涙が一ぱい溜つていた。

「御苦勞」

と言うや、表へ出て行つてしまつた。その時よりこの馬之助の道樂がやまつたといわれている。

ところがこのことが評判になつた。乞食坊主も仲々偉いなあと云う噂がとんだ。或る老人が「良寛さま、貴方は高德なお方ぢや」なると偉いお方だろう、一言も小言をなさらず、タッタ一しづくの涙であのような道樂息子を改心させた貴方の御手際は大したものだ」と良寛さんに言ふと、「わしの涙で道樂が止まつたなどと言うのはウソぢや、何でわしが獄道息子の爲に涙を流すか、わしの爲に流した涙ぢやわい」との返事に老人は驚いた。「へーい、それは又どうした譯ですか」良寛さんは、「先方に頼まれて、實はわしもどう意見

しようかと色々考えたが、仲々名文句が出ない。出ないのも道理、わしの若い頃の道樂を思い出したからなあ、わしが出家する前にさんさん道樂をして來たのぢや、馬之助に意見しようと考えているうち、フツと思ひ出したのぢや、息子に對して意見どころか、このわしが恥かしくて意見を止めた。それでもいよく歸るとなると、わざわざわしを呼んで意見をして貰おうと思つて、色々御馳走をして呉れた弟への義理から何か一言意見しようと思つて呼んで貰ひわしの草鞋の紐を結んで貰ひ、その時何か一言釘を打つて引揚げようと考えた時、何としぶとい、醜い自分だろう、何か一言意見しようと考えたわしが急に恥しくなつた思はず涙がこぼれたわけだ、お前さんの言うように獄道息子に流した涙ではない」と言われたと言う。この謙虛な心、この反省の心が道樂者の馬之助を感化したのである。

このような日々を送つていた良寛さんの名は越後地方だけにとどまらず次第に四方に傳えられ、當時第一流の書家である龜田鵬齋は五合菴に良寛さんを訪ねて草書の筆法を學び、京都の一流歌人大村光枝は五合菴で良寛さんと歌の贈答をした。書も歌も何時しか中央に知られ一流となつた。併し彼の最も嫌いなものは「書家の書、歌よみの歌、料理人の料理」であつた。

良寛さんと念佛

良寛さんは禪寺に於て出家し、禪によつて培われたのであるからその生涯は禪僧としてうるわしく生きられたことは勿論であるがそ

の歌を通じて良寛さんも亦念佛に生きられたことがうかがわれる。

不可思議の彌陀の誓のなかりせば

何をこの世の思い出にせむ

われながらうれしくもあるが彌陀佛の

いますみ國に行くと思へば

おろかなる身こそなか／＼うれしけれ

彌陀のちかひにあふと思へば

自ら大愚と名乗つた良寛さんの法悦の氣持がただようている。愚痴に還つて念佛する法然上人の心と一脈相通するものがある。

草の菴にねてもさめてももうすこと

南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

良寛に辭世あるかと人とはば

南無阿彌陀佛といふとこたへよ

行住坐臥口をついて出てくるのは稱名であり、花をめで月を眺めて稱えたのも念佛であつた。時處諸縁をとわず稱えた南無阿彌陀佛は、そのまゝ辭世の念佛でもあつたのである。

晩 年

五合菴に住むこと前後十三年、還暦近き老境になつては峻しい坂道の上下に苦痛感ずる様になり、五十九才の時山麓乙子の境内に空いた菴室があつたのを幸い、そこに移り住んだ。老齡の爲今迄程所々を歩くことは出来ないかわり、こゝは里に近いただけ訪ねて来る人も多く、特に子供等が毎日遊びに来て呉れるのは何よりの楽しみで

月の兎の話をはじめ、釋尊の前生物語を子供にわかりやすく話して聞かせたことであろう。

又唯一の法弟遍澄がしば／＼訪ねてきて、種々の雜役をして良寛さんを助けた。このようにして乙子の宮に住むこと十年、この間良寛さんの體は目にみえておとろえてきた。歸依者達は良寛さんの一人暮らしを心配し、その一人島崎村の木村元右衛門は自分の邸に招き良寛さんは木村邸の物置小屋に移り住むことゝなつた。

孤獨落莫たる良寛さんの晩年に一つの明るさもたらしたのは貞心尼の出現である。二十九才の年若き貞心尼は木村家の物置小屋を訪ねていろ／＼の教えをうけ、特に歌の贈答が多かつた。

歌やよまむ手毬やつかむ野にや出む

君がまにまになして遊ばね

歌もよまむ手毬もつかむ野にも出む

こころ一つをさだめかねつも

死期近き老師良寛さんは生命最後の光を放ち、貞心尼はまた信仰生活のよりどころとし、全心的によりすがつた。

物置小屋に居ること五年、天保元年の暮も近い、ふとした病上り段々重態に陥り、遍澄、貞心の手厚い看護をうけ、十二月廿五日には弟の由之も來り、狭い一室に四人が共に起き伏しゝて年を越し、形見とて何かのこさむ春は花

山ほとゝぎす秋はもみぢば

の一首を辭世として、天保二年（一八三一）正月六日眠るが如くその生涯をとじたのである。

人情記者の

手帖から

山崎安雄

私は最近「人情記者失格す」という、つたない本を書きました。その中で初めて明かしたのですが、これまでの長い年月、風がわりな人々（適當な言葉が見つからないので）と親しくして参りました。元吉原で妓夫太郎をしていた盲目の老人もいれば、越後のわかめ賣り姉妹もいる、九十才で死んだ無期懲役歸りの老博徒とも父子のような仲だつたし、黒人との混血兒を生んだ女のために、彼女の手記をまとめて一冊の本（エミーよ）をつくつてやつたこともあります。

そして今また、刑務所の獨房に泣く二十六才の一青年のために、どうしたら彼を更生させられようかと心をくだいています。

この青年は宇野政二君といつて、強盜の嫌疑が晴れぬままに、既に九カ月餘も未決監につながれています。しかも胸を病む根上加代子さんという二十三才になる女性が、まだ見ぬ彼に美しい愛情をささげているのです。彼女は初め、獄中の宇野君のためにキリスト教の傳道をつづけていたのですが、あまりにも美しい彼の心情に打たれて、いつか將來を誓いあう仲となつてしまつたのです。

獄中から私に寄せた宇野君の手紙をお目にかけましょう。――

私が根上お姉さまに書き送りました手紙を、先生は大變ほめて下さいますが、ただ私のまごころが籠つていゝということだけ理解して下さればこれに越した喜びはありません。根上お姉さまから愛を打ち明けられた私は、その愛を受け入れる資格がはたしてあるだろうかと迷います。お姉さまが二百gの咯血をしながら私に書き送つて参りましたお手紙は、どんな鬼のごとき人も泣かしめ

る力を持っています。

私は社會に居ります時、芝浦の日本製藥株式會社に二百八千圓で血を賣つたことがありました。その金の使途は愛する人のためだつた。しかもその人のために罪を犯さなければならなかつた私は、揚句の果てに捨てられた！ 私は馬鹿だつたのです。その人の言葉を信じて、自分はドン底に落ち込んだ。落ちて見てはじめて目がさめたのです。母親とてない私は、これからどうなる。母なし子の私はどうなる。私の歩んで來た道を深く理解してくれる人はこの世にいないのだろうか？ 神さま、私を愛し給うなら、私の全てを理解する人を與え給えと祈る私でした。

でも神は私を捨ててはいなかつた。私から見れば奇蹟としか思えない根上さんとの文通が始まつたのです。ああここにも私と同じく悩み悲しみ、そして病に倒れ永い闘病生活をしている弱き女性がいる。私は、自分の心のありだけを費やし、根上お姉さまを慰めるために努力をしたのです。私の考えること、私の言うこと、私の悲しみ悩み、全てお姉さまに判らないものはなかつたのです。そして私を慰め勵まし、信仰によつて立ち上がることを教えてくれたのです。信仰私にとつてそれは決して耳新しいものではなかつたのです。キリスト教の教は十二才の時から受けました。罪を犯す前にも救世軍に士官を志望していろいろ勉強していた私何故罪を犯さなければならなかつたのか？ 私は淋しかつた！ 小さいときから餘りにもいためつけられて來た私の肉と靈は醜い場所が、家庭がほしかつた。暖い家庭がほしかつたのです。そ

れ故、女性の愛情には異常なほど弱い私だつたのです。

しかし根上お姉さまの血を吐く思ひの、私に對する救いの行いは私をして正しい信仰に進ましめ、正しい愛とはいかなるものであるかを身をもつて教えて下さいました。「私はもうあなたを手離さない」お姉さまは叫んだ！「私のところに何時迄もいてね」とお姉さまは涙をもつて、私に書き送つて参りました。便箋の上には數滴の涙の跡……。この位自分を犠牲にした愛情がありましたようか。私のような私生兒同然な、しかも法を犯した罪人をも、お姉さまは全力をもつて愛して下されたのです。私は希望の灯を見出し、神に感謝し、神の道に進む決心をした。世の不幸な人々のために働こう。そのことが、神が私に與え給うた大いなる恩恵に對する答えになるのだと。――

私はそれ以來聖書に親しみ、現在の落ち着いた人間らしい心をもつことが出來たのです。

山崎先生の優しい愛に包まれて、このような拘禁生活においても何一つ不自由しない生活が出来る私の今の境遇！(毎月、私から送金している意味)私の生れてから二十六年になる今迄夢にまで見ていた人の情を、はからずも神は拘置所という冷たい獄において私に與え給うたのです。人間いついかなる時も希望を捨ててはいけないということが、私に體驗を通して判つたのです。でも私はいつ自由になるか判らぬ身、私はそれが一番苦しい。でも全て神が知り給う。最後迄神に、そして友なるイエス様を通して祈り私達二人の愛を固く結ばしめていただくよう、願わなければなり

ません。

この手紙にもあるように彼には、母がないのです。生れるときから母というものを知らないのです。父が女中に手をつけて生まれました不幸な子だったからです。當然母は追い出され、彼は宇野家の二男として入籍されながら、世間をはばかり親たちは、三疊の女中部屋に押し込んで終日外に出さなかつた。父を同じくする兄や妹たちは、おいしいケーキを食べているのに、彼にはさつま芋きりやらなかつた。繼母のために彼は、兩手をうしろにしばられて押入れの中で泣いたまま眠つてしまつたこともある。だから小學校に行つてゐる時は、陽のあるうちは運動場で遊んでいて家へ歸らなかつた。家ほど繼母ほど恐ろしいところはなかつたのです。小學校卒業後、小鹽塾という孤兒ばかりの塾へ入つたのも、繼母の顔を見たくなかつたからです。十六才で豫科練を志願して東京驛を出發するというのに、彼に一人の肉親の見送りもなかつた。敗戦となり、胸膜炎をわずらう身を重い衣囊をかついで、わが家にたどりついたが、お前の歸つてくるところではないと、中へ入れてくれなかつた。「そんなことをいわないで、今夜だけでも泊めて下さい。もう十一時を過ぎています。どこへ行つても泊るところありません」と哀願するのに、泥棒か何かを追い出すように、ビシビシ鍵をかけてしまつた。仕方なく彼は、わが家の軒先で石の上に毛布をひろげて寝たのです。朝になつて、顔を洗う水もないので、裏にまわつて鶏小屋の上に置いてある、菜ッ葉の浮いた洗面器で顔を洗いました。……

こんな境涯をとつてきた彼は、社會の荒波に抗する力も失つて憩いの場所を刑務所に求めたのです。そこではからずも強盜の嫌疑をきせられたのですが、何んら希望のない彼は、當局のいいなりになつてしまつたのでした。

そういう彼の前に現れたのが、根上加代子さんでした。彼女と同じ町内の少年が殺人罪で刑務所に送られ、親たちの嘆きを見るにつけても、宗教の力以外この少年を救う道はないと、愛の傳道を手紙に託して始めたのでした。獄中で彼女の手紙を讀んだ少年は、うれしさのあまり運動場で知り合つた宇野君に、その話をしたのです。「自分も、その女性の手紙がほしい。ただけるように話してくれないか」ということになつて、彼女は、病床で「二人の弟」に神の愛を説きはじめたのです。

彼女の境涯もまた數奇をきわめています。父は彼女が幼ない頃滿洲へ出奔したまま行方が知れず、母もまた彼女を捨てて他家に嫁ぎ他人の妻であり既に二兒の母となつています。數年前彼女は臺灣の醫師と結婚しましたが、その夫は不和關係からある女に殺されてしまい、彼女は、もう長いこと胸を病んで叔父の家に厄介になつてゐるのです。

そういう二人の、似かよつた人生が、ともにひき合うのか、「弟」としての傳道は、いま愛情で結ばれるに至つたのです。でもまだ二人は會つたことさえなく、従つて顔も知らない仲なのです。宇野君は、次のような文面の葉書を、私に寄せています。

昨日裁判所に行つて参りました。被害者が何處かに逃げてしまつ

て判らないとかで、それを捜査するのに日数がかかるのでまた延期になりました。けれど段々に終りに近づいて参ります。次回は三月二十九日午後一時です。一番車、二番車、三番車と次々に小菅を後に一路裁判所に向かつて進む護送バス……その内二番車に私は乗つて、一カ月ぶりで眺める社會の様々な風景に思わず驚きの聲を發します。春の日射が道行く人々の顔を明るく照らしているからです。

春、春、それはなんと楽しいものでしょう。けれど私はすぐ眼をとじてしまいました。愛するお姉様とそして優しい先生(私のこと)と、あの新鮮な空氣を思い切り胸に吸つて散歩したい。それなのに、私にはそれが許されない。眼に映る人々が、誰でもかれも樂しそうに見えて仕方ないし、みんな幸福なんだ。神様は私に何故幸福を與えないんでしょう。……いや、私には充分すぎる幸福があることを忘れていた。世界中で一番私を愛してくれる人がいるんだ。その人も病床に苦しんでいる。共に苦しみをわかとう。……私は靜かに眼を開いた。そしたら道行く人々の顔が、みんな悲しそうな淋しそうな疲れていそうな顔に見える。矢張り私は神様に愛されているんだと、嬉しくなりました。

その後私は、三月二十九日と知らせてきた彼の裁判に立會いました。彼が強盜罪になるのかどうかという大切な裁判なのに、親類縁者一人として来ていません。肉親の父さえ顔を出さないのです。いや裁判の日も知らないのでしょうか。裁かれる彼を中心に、裁判長と

検事と官選辯護人と、傍聴の私だけでした。重い手錠と太い縄にいましめられた彼を見れば、知らない人は、どんなに凶悪犯かと思うことでしよう。私が送つてやつた私の従軍服を着ている彼は、とても他人とは思えず、自分がともに裁かれているような身のひきしまる思いでした。

その日も、被害者が見つからないという理由で、また一カ月延期となり、何回でもこんなことを繰り返しています。しかし一カ月間を獨房にとじこめられていることは、どんなに苦しいことか！ それをやつてみないものにわかるでしょうか？ 二十六才の青春の血潮を、じつと押さえて、きょうも彼は、僅か一坪半に満たないオリの中に、「動物園の熊のように行つたり來たりしています」といつています。

母の愛を知らぬばかりに、冷たい環境に育つたため、こんな素直な青年さえ惡の道に落ちてしまつたのです。もし彼の母が、自分の腹をいためた子が、獨房で母を求めて泣いていることを知つたらどうでしょう。彼は、いま獄中でまだ見ぬ母にあてて長い手紙を書いていきます。生れてから今日に至る二十六年の生涯を、こんなつらい思いをして参りましたと、涙をこぶしでぬぐいながら綴つていきます。それは、私が書くように勧めたのです。書き方もいろいろ指示しています。出來あがつたら一冊の本にまとめて、世に問うつもりです。彼がさがし求める母の眼に觸れない限りもないでしょう。また世の多くの人々に、母の愛のいかに大切なものであるかを教えるでしよう。そのほかに、私としては、出獄後の彼の更生資金を用意したいからです。彼は彼で、自分のことはどうでもいいから、病いの重い彼女の療養費がそれによつて得られればと念じています。

書評

歌集

「うたぬき」

田中淡月尼の歌集「うたぬき」が発刊された。私が同尼にお目にかかったのは

くろかみは今断たれけり筆の名の淡月のま
ま此丘尼ぞわれは

安けさをこゝに求めてわれ遂に佛のみでし
となりけるかな

と薙髪後間もない頃

閻浮檀金光背輝く如來彌陀くろきお坐像の
おんおもうるはしく

十年のちりにまみれて丈六の慈眼におはす
くろきみ佛

國寶本尊阿彌陀如來を安置せる江州金體寺に
寓居中であつた。

四尺五寸八メのわがたまのをの五十といふ
にいよよかほそく

と自ら詠じている様に五十の老尼で、邪氣の

寸分も感じられない四尺五寸の童尼である。

物の無き廣々しさにありなれて机に向へば

楽しくありけり

うり住みの八年になりてへやぬちは書籍を

あますのみとなりけり

清貧そのまの、部屋の中は多くの蔵書のみが
目を引く、それで尙インフレの嵐に数多くの
蔵書を手放した斷腸の思いがうたわれてい
る。

配給の不足をひとらきぬうりて蔵書をうり

ていのちつなぐぬ

いささかの本うりければこの月も滞りなく

日はたつらむか

大地の土と爪の上にのるだけの土の比の様に
も生れ難き人と生れた果報に喜ぶ佛者、併し
廿世紀の悲劇、原水爆の果は山奥の世捨人の
尼僧さんにもひし／＼と容赦なく迫つてく
る。

爪上の土の果報とうべなへど放射の雨かけ

ふもふりつく

生者必滅、諸行無常の理も嚴としてある。

苛責なきこの秒針のたしかさは遂に示さむ

わが果つる刻をも

移る世に山福田も空しけれ牛の札や、庫裡

をうるほす

牛馬の健康を祈るお札を賣つてや、庫裡がう
るおうと言う尼寺の貧しき生活、その中にあ
つてみ佛のお慈悲の深さに泣き、御恩の高さ
に喜びつつ、法然上人のすゝめ給うお念佛の
稱名生活を送つてゐる。

あつゑかつぎて申すお念佛さら／＼雪はふ
りつむらしも

あみだぶと申すこの身がみ佛のなげきの一
人と涙ながるる

この歌集には、随分と秀歌もあることと思
うが、唯歌集をひもとき、同尼の生活を思い
その紹介をかねて幾つかを抜き出してみた。
いろ／＼世の苦勞をされ、又種々の學問をき
わめられた同尼の思想の豊かさ、生活のつゝ
ましやかさが偲ばれる。

著者 滋賀縣栗太郡栗東町御園

田中淡月

(定價二〇〇・送料三〇圓)

(新保義道)

法 華 咲 く 善 光 寺



丸 山 幽 水

一光三尊佛の徳を讃える善光寺御開帖は四月十日から嚴修された。全國の信徒達は最近發達したバスに乗つて、關東一圓は申すまでもなく、伊豆の下田港から運轉手交代の二日ばかりで來たのや、遠く陸奥の果から觀光バス「みちのく號」で繰込んで來られたのを見て、今や善光寺詣りは「バスに乗つて」の時代が現出した。

佛閣屋根の長野驛を下りて中央通りの緩い坂道を行詰めた處が善光寺靈場である。バスの終點近くに尼公上人の大本願の殿堂が建並んで、先頃、鷹司誓玉尼御入山の當日は、この附近は身動きもならず、各社の報道陣數十名が物々しく乗込んで佛都の人々を驚かせた。參道の右側には一山の宿坊が並んで出入の書記や土産物商人で朝は早くから雜踏を極めてゐる。正面の石段を登れば、定額山の額もあざやかな仁王門。米原雲海、高村光雲の偉業として遺る巨大な文化財は、逞ましい姿で佛都を睥睨して護法の座にある。

「昔、この賽銭箱を持逃げしようとした泥棒がありました。重さのため思わず一發放したところ仁王様は立所に、この曲者奴がと呼び返しますと、泥棒はおゝ仁王かとやり返したそうであります」

案内人の漫談口調の説明をきいて爆笑する信徒群などまづ参詣もほがらかに始まる。

仁王門を出ると仲見世あり、數多の土産物店が立並んでいる。やがて駒返り橋というのがあつて、此處から寺内となる。右手には、

昨年夏、新たに建立された六地藏、臺座の石も白く安置されて善男善女の渴仰の的となつた。地藏尊一體につき百萬圓、お臺座工事百五十萬圓、計七百五十萬也を云々する唯物論者もあつたが、今や彌迦滅後、彌勒出現に至るまでの無佛の天地間を司さどる佛説が、老若の間に信仰の火と燃えて、善光寺参詣の人々に大きな精神のプラスとなつたことは悦ばしい。

二

六地藏尊に隣りして一基の大地蔵尊があ

る。お七藏と呼んで明曆の昔、江戸八百八町を焼いた八百屋お七の菩提を弔うために良人の吉三郎が寄進したものと伝えられる。錫杖を肩に寶珠を手にされたその溫顔は鳩にも親しまれて、いつも澤山の鳩がお膝の上や肩先きに戯れているのもほほえましい。

石段を登れば山門が建ち松籟の中に風鐸がゆれて、さわやかな響きを奏でている。山門を抜けると善光寺金堂である。

見上ぐれば大善光寺天の山（飛山）

二重屋根撞木造り、江戸の名匠甲羅宗賀晩年の傑作。總桂材で俗に桂御堂と呼ばれ異色ある大建造物には参詣人も目も見張る。古來善光寺は幾度か炎上し、その守り本尊も幾度か遷座され、戰國の世の苦難をつぶさになめられたのである。

御開帳中は本堂前に同向柱が建てられてある。本堂に入れば内陣正面には御開山善光寺御一族の像、西の間には善光寺如來が安置されてある。大欄間には廿五菩薩の來迎の像、大天井から吊られた二連の瓔珞など、燦然として信徒の目をひくものであろう。

毎朝、本堂に於て住職の勤行あり、信徒達は隨喜して、御珠數頂戴や、御戒壇めぐりをした後、境内を拜觀し更に、雲上殿納骨堂へ参拜されるのである。境内に出ると、鍾樓近くに牛王殿があり、先年印度のビルラ尊者から寄進された聖牛が、やさしい眼差しで信徒達を眺めている。この邊には珠數賣りや、土産物商人が右往左往して、賑やかな境内風景が見られる。松林の中には、淺黄のれんに白く「三國一の甘酒」などと染抜いた甘酒茶屋が點在して、旅の参詣者の憩の場所となつてゐる。また本堂屋根の噴水消火裝置を眺めて感嘆している信徒もみえる。從來は本堂裏の用水池から非常用水を供給したのであるが今度文化財保護委員會の協力で、莫大な工費により一朝有事の際は、全伽藍が水中に包まれる消火裝置が完成された。

珍風景なのは本堂軒端の垂木の間に、無數の山燕が巢をかけていることである。本堂裏手に廻ると永い風雨にさらされた一基の石燈籠がある。石面には江戸吉原、三浦屋四郎左衛門寄進とあり、有名な花魁高尾の菩提を弔

うための樓主の切なる心やりであつた。

君は今、駒形あたり時鳥

思い出さずに忘れずに

殿を慕い参らせ候

その方は、苦海にあり乍らも念佛精進意らず、晩年佛門に歸依する心あつかつたという花魁高尾の霊は何處にあるうか、いま無心な残りの山櫻の片々が燈籠の笠石の上に舞い散つて、みやびな遊女の幽魂を慰めているに過ぎない。

三

更に西の境内に廻れば奇しき因縁の貌燈籠が立ち、その背後には一切經を藏した廻轉式の經堂が參詣の信徒達の念力によつて靜かに廻されているのも、いみじい靈物風景であるもうこの附近の林間には藪鶯が鳴いて、靈場の初夏は訪れつつある。

本堂の眞裏、尼公上人御廟所の脇を抜けて行けば、榎、樺、櫟などの大木が生い繁つた樹の間に、無縁の墓地が累々としている。昨年の秋も深い頃、山口縣の或る尼僧の方が、

その夢じらせによつて、一つの墓地清掃隊を募つて參詣され、一日にして無縁の墓石を整備された。その後、墓相研究家と稱する人が時々自分の許を訪れて、無縁佛の千燈供養の話などして行かれたこともあつた。人間、縁あつて善光寺に詣で、その如來のお膝元で生涯を終つたということは、よくよくの縁の深いことである。およそ人の死の縁は、時處を撰ばず、大小便利な處で死ぬこともあり、また然らざることもありと、法然上人も仰せられた。此處に眠る人も又、倅せということであらう。

この墓地を抜けた處に、三つの用水池がある。池のほとりには、櫟や樺の大樹が立ち並んで、その青芽立つ頃は、何ともいえぬ、すがすがしさである。此頃では、河原ひねが、終日、樹間に囀つて、山内の初夏は先づ此邊の小鳥の群から訪れるのである。

池の對岸には現在では、温泉旅館などが建ち、貸ボートが浮んで昔日の面影はないが、かつては池の汀に群生した葦の中に、鴨などが立ち騒いで、秋の頃には佇しい雲影が水面

に落ちて、西行法師も一偏上人も、この水邊で旅の汗を拭つた處であつた。

史實によれば西行も信濃路に奥深く足を踏み入れている。

この奥に櫻の里やありぬらん

裾花川と人は云うなり（西行）

四

念佛の行者とうたわれた西行も、花情に佛心を寄せて、その優雅な風懷を吐露した。身はほまれ高い北面の武士であり、體ゆたかな偉丈夫であつた彼は、若くして出家し一笠一杖の行脚をかさねた。青春の誇りを捨て、逞ましい希望も斷ち、ひたすらに佛道修行に志した謙虛な求道心には涙ぐましいものがある。佛都の西を流れる裾花川の岸頭に立つて亂れ流れる花びらに見とれた西行は、いつか生身の姿がうすらいで、法の心の濃くなつてゆくのを我と我身に覺えたことであらう。

また、源賴朝の記録によると治承三年、壽永二年、建久八年の三度、あまたの家臣たちと善光寺に參詣され、一光三尊佛の佛縁にあ

やかり、数々の供物を奉納されたことが吾妻鏡に見えている。

殊に壽永二年の時は、本堂炎上後、間もない頃で礎石の外には何一つなく、さすが權勢の美酒酔うていた頼朝も、境内の松の根下で有爲轉變の人の世のさまに深い感慨に耽つたという。

この三つの用水池を隔て、はるか彼方の丘陵の中腹青葉がくれに見えるのが雲上殿納骨堂である。雲上殿は、鐵筋を利用した近代建築であるが、天平時代の様式を加味した壯麗なものである。現在、百余萬にのぼる精靈が安置され、地下室の共同納骨まで完備している。雲上殿の内部には野生司香雪畫伯の筆に成る善光寺縁起の壁畫が美しく掲げられている。中央の多寶塔の樓臺に立つならば、善光寺平一圖の風光が俯瞰されて、夕ぐれともなれば、殘雪の周圍の連峯が、ばら色に映えて、莊嚴な淨土の有様をほうふつとさせる。

高原特有の千切雲など、時に山越しの彌陀像を思わせるものがある。合掌して山容に對し瞑目して山靈に謝する氣持ちになるのもこの

處である。

五

觀光バスは、雲上殿から青葉の展望道路にかゝるのが順序である。

緑の濃い羊腸道をゆくバスの窓からは、遠く川中島の古戦物が望まれ、淺間の噴煙も澄み切つた空に、靜かに白煙を棚引かせている。傾斜地には、材櫓、梨の花など満開で、やがて山藤の花が美しい房を斷崖の上から下げ、岩の間に、鬼つつじが燃えるのも間近いのである。

紫の桐の花が、バスの窓にふれ、甘すつばい香氣を車内に漂わせるなど、都會地では味わえぬ風趣であらう。時雨澤に近く、謙信物見の岩というのが、山頂近くに聳えている。天文の昔、川中島合戦の上杉謙信が、此處から三軍を叱咤したと伝えられる。またこの附近には合戦々歿者を埋めた首塚などがあり、ぼけの花がその周りに咲亂れているのも侘しい風景である。

バスが歌ヶ丘の前に停ると、相馬御風始め

諸名士が、この附近の風光を讀えた歌や詩の碑が澤山に建てられてある。日本山妙法寺の尼寺も、最近この一角に建立された。

四海みな妙法に歸せ青嵐

寺門は堅くとざされているが、おそ咲きの山櫻が風もなく散る山の尼寺の風情は、捨て難いものがある。

バスは更に、時雨澤に下りて、うつそうとした杉林の中を縫い、急坂を登れば往生寺近くの林檎園地に入る。緑の園に、白砂糖を撒いたような景色が、林檎の林である。

刈萱上人のゆかりの地である往生寺は、展望道路から更に、急坂を上つた場所にあり、寺の近くでは、名産の林檎や、素朴な石童丸の泥人形などの店が並んでいる。寺内には、「夕やけ小やけの鐘」がある。童謡作曲の草山信氏は、この佛都の出身である。

法の華さく善光寺、信仰リクリエーションとしても先づ善光寺參詣は、數ある靈物のうちですその名を唱われるものであらう。

*

*

*



新島守

鶴田湛泉

北條時政に次いで執權となつた義時の權略は、父に越えてゐた。幕府は實權ます／＼強大にならうとして討幕の院宣、宣旨の下つたのは、承久三年五月十五日のことである。

院に於ける秘かな討幕計畫を、早くも京に於けるその周密な偵察網によつて窺知した幕府は、直ちに諸國の武士を徵集したのであつた。將士の中には、事の余りの意外に驚き、去就に迷ふものが多く、參集の兵、僅かに十八騎にすぎなかつたが、直ちに出發を命じ、廿一日、泰時主將となつて鎌倉を進發した。三日目に十萬余騎を得て、後續の諸軍は、東海、東山、北陸の三道に分れて西へと上つて行つた。

かくて六月十四日、雲霞の如き東國の武士十八萬騎雪崩をうつて京に侵入して來た。世にいふ承久の亂である。

後鳥羽院は、御理想の實現を企圖せられたが、不幸にして時運なほ至らずして、却つて正反對の結果を招き給ふ事となつた。

七月六日、院は網代車に召され四辻殿を出られ洛外

の鳥羽殿へ遷幸された。この日京の庶民はみな門戸を閉ざして悲しまぬものはなかつた。鳥羽殿の警戒嚴重を極め離宮の芝生まで兵があふれ、武士を以て墻が築かれてゐた。この容子を眺めて、君臣共にそぞろに斷腸の思ひであつた。

八日には、六波羅の意向によつて御落飾、戒師には、御室の道助法親王が奉仕した。

十三日、鳥羽殿より隠岐へと向はれた。仙駕の供奉の人々は、内藏頭清範、女房西御方、伊賀局龜菊等であつた。播磨の加古川に來た時、供奉の清範が急病のため京へ歸り、代りに施藥除使、醫師和氣長成と左衛門尉能成とがお供する事となつた。

廿七日、出雲大瀨に到着され、そこから遙かなる浪路を島へと渡られ、隱岐國阿摩郡刈田郡郷に着かれたのは、八月五日のことであつた。

暴戾にも幕府は、自己の安泰のために、第二の承久の亂を未然に防がんとしたものか、時を同じうして、順德上皇は佐渡へ、六條宮雅成親王は但馬に、冷泉宮は備前兒島に移らし給ひ、各々その地の守護に警固を命じたのであつた。御子、土御門上皇は御孝心深く、父皇の京外の遷らせ給ふに獨り晏然として都に在るに忍びずとて、幕府の諫奏を退け給ふて御心に任せて、自ら土佐國へ遷られた。

三上皇遷幸、二親王配流と云ふ幕府のこの暴舉は、天下の人心に大きな衝動を與へたのは云ふまでもない。天日ために光なく、陰雲

六十六國の空に溢つてゐた。

殊に、秋もたけなはの萬目蕭條たる隱岐の孤島は、ひとしほ寂寥を思はせた。

行官は、人里も遠く海邊から離れて山蔭の大きな殿の峙てるに寄せて營まれてゐた。松の柱に、葦葺いた廊など風情だけは秀でてゐたが、粗末な筥ぶきの天井、竹の簀子などは、かつては障子の繪で御覽じられた事の外には、御眠に觸れ給ふた事さへないものであつた。仙宮の翠帳紅閨は、柴扉桑門と改められた別天地であつた。

見渡せば、雲か海か沉々たる大洋の眺めは、何れが南北さへ辯じがたく、煙波漫々として、書を運ぶと云ふ鳥さへ、こゝへ來る道を知らず、又迷ひ來もせぬだらうと思はれた。

玉殿の主から、遠島のわらやに軒をならべて、御日常の御料にさへことかく急轉は、叡慮のほども如何ばかりだつたかと拜される。

これまで院の周圍と生活は、詩歌の指導者としてこの上ない多彩と華麗の玉樓から一朝にして、孤獨閑寂への急變はあの平家の悲劇よりも、壯大にしていたましいものであつた。

それにしても、島の最初の日に、潮鳴り怒濤岩を洗ひ、海風木梢を吹き渡るを聞き召されて、御感慨無量に、

われこそは新島守よ おきの海の

あらし浪風 こゝろして吹け

と、天に訴へ地に叫ばれて、逆境にもめげぬ雄々しい御氣魄であ

つた。

院が、毘沙門堂の明禪法印に御書を下されて、淨土の法門を問はれたのは、實にこの時であつた。

二

洛北、毘沙門堂の明禪法印は、參議成頼郷の息で、天台眞言の學を深く修めた山門の英傑であつた。勉學時代貧しかつたので學資に乏しく、燈火の絶えた時、花垣の萩を焼いて其の光で書を読んだので、萩燈の法印とも呼ばれてゐた。

法印は、念佛門へ歸入した動機を、自著の述懷抄に記して云ふ。

この頃法然上人が淨土宗を開いて念佛の行をすすめる様を眺めて彼も舊佛教の一人として心甚だおだやかではなかつた。底い教と輕くけなして、學者の信ずるものは非ずとしてゐた。それでゐて隆昌をそねむ心熾りであつた。

或るとき、上人の門弟法蓮房信空と會して問答することがあつた。二人の間に、喧々譁々の議論が戦はされた。

明禪の議論が淨土の教理について何の智識を持たない獨斷であると感じたのか、食はず嫌いの態度をたしなめるやうに、

「先ず淨土の教をきかないでは、信ずるも謗るも共に誤でありませぬか、先師上人の著述された一書あり、それを一讀あつて後、或は信じ、又は誹謗するなり至されよ」

と、信空は、選擇集を贈つて一讀をすすめた。

早速と讀み初めてみたが、先入感があつたものか、何の感興も引き起さずに讀み終つた。

再度よみ直してみたが、やはりどうも偏見の理論にすぎないといつまらなさを感ずるのみであつた。

ところが、三度よみ直して見ると意外であつた。今まで氣づかなかつた深い意義を感じて、新鮮な主張にぐんぐん魅せられ、心のときめきさへ感ずるのであつた。尙、更に、四返五遍とくりかへしよみ直して見ると、所論に大いなる感銘を受け、偉大なる師父のやうな手離せない愛讀者となつてしまつた。

眞實一路をたどらうとする明禪にとつては、今や念佛こそ自己を救ふ道と悟つた。淨土宗の神髓にふれた明禪は、感激のあまり硯を洗つて改悔の筆を執り選擇集を寫し取ると、表紙の裏面に、「源空上人の選擇集は未代念佛行者の目足なり」と、讀字を書きつらねた。

先きの誹謗の先鋒者、今は、淨土の教へと心酔し、熱烈な念佛の信奉者と一變した明禪は、更に述懷抄を著して上人の義を布延し、弘通を計らんと心に燃えたのであつた。

淨土門に轉信してから、いよいよ人々の歸信を集めて聖覺、明禪と並べ稱せられるほどとなり、その名聲都鄙に普く響いて、彼を訪ねて念佛の教を乞ふもの踵を接してゐた。

彼は、法然上人を評して、

「我朝に淨土をすすめ念佛をすすめる人おほしといへども、この上人信勝ともに人にこえたり」と云つてゐる。

それほど、上人は世に問題とされた。

これは、上人の念佛の主張が、これまでの諸宗の傳統的な主張とかけはなれてゐた新しい主張であつたからである。選擇念佛は、新しい主張であつたし、上人は、秋霜烈日の烈しさで信ずる所に忠實ならうとする熱意に燃えてゐたので、當然、そこに世間のそしりと攻撃とが起つて來た。

淨土をすすめ念佛をひろむる人は、今までも、良忍、空也、惠心と數多かつたが、一向專念の教をすすめ、日常生活への念佛へと前進せしめたのは上人が初めてである。ここに、俄然、はげしい信勝の相反する二つが逆巻き起つてきた。

傳統の殻を破つて、時代の歩みに歩調を揃へた、新しい道を拓いた新宗教だつたので、熱烈な信者と烈しい謗者とにわかれて來た。それほど水際だつた新しい宗教だつたからこそ、念佛は、時人の心を把み救ひとなつたのであつた。

三

承久三年、事によつて但馬に遷られて間もない頃、六條宮（後鳥羽院第二皇子雅成親王）から明禪に、念佛往生についておたづねあつた。彼は、肝要な文を集めて詳しく奉答したのであつた。

遠島で早や六年の御不自由な生活を送られ、歌と佛典の研究に御心を注がれてゐた後鳥羽院は、嘉祿二年正月十五日、隱岐國の御所から大原の西林院の承圓僧正（關白松殿基房の息）に御書を下されて、散心念佛のことについて明禪に詳しく尋ねて、最上の肝要な點を記し申すべきことを命じられた。御書は長文で、深い佛教への御理解の程を伺へるものである。承圓は御旨を承ると、御書を進覽して所存をのこらずしるし給はるべしと依頼した。

さぞかし明禪は、遠島の院を偲ばれて、目頭を熱くしながら奉答の文を認めた事であらう。

日本海の孤島に於ての院の御日常は、ただ歌にのみ希望を持たれた御生活であつた。院の御才能は、多方面に及んでゐて、武技を好まれよく劍を相され刀を鍛られ、琵琶を究められ、笛箏にも御造詣深くよろづの道に明らかでおはしたが、とりわけ秀れてゐられたのは和歌の道であつた。元久二年、王朝和歌の最高峯とも云へる新今古集を勅撰された院は、列聖稀れに見る歌聖であつた。島に於ても「遠島御百首」「遠島御歌合」「遠島御抄」等を著述されてゐる。この時代は、攝政の藤原良經を初めとして定家、家隆、通具、有家等と和歌の巨匠が、院を中心として多く輩出した。そののみか、院の文藝上に及ぼされた光を、今尚、欽仰し追慕し奉る者が多い。

院の歌は、いづれも涙を誘ふやうな悲壯にして心うつ作品である。深刻で切迫した吐息のやうな調べは、悲調といふより悲壯である。

る。西行のやうな深い感傷ではない。單なる抒情ではない。長明のやうな咏嘆の言葉ではないわびしい叙景でもない。人生をちつと凝視された生々しくたくましい詩であつた。御體と御運との表現である。たどられた道は、いかなる人も經驚せぬやうな生々しい現實の忍苦であつた。そこから生れた作品であつた。

ここは、絶海の孤島である。薄い墨染の僧衣を纏はれ寒い御夜具に包まれて、絶えまなく訪ねる荒磯の潮鳴の叫びを聞かれたであらう。浮世のなやみの果てに好んで遁れ出た閑寂な境ではなかつた。至尊の身として、孤島の人里離れた山かげのわびしい御住家に耐へられ、大きく生きられてゐた。さればこそ、院は深く信仰の生活へ入つて行かれたのであつた。

四

院は、敷島の道にもまして、佛典の御研究に觀心を注がれてゐた。

かつての日、法然上人から御受戒なされ、熊野山へは殆んど毎年御幸になり、梅尾の明惠をも尊信され、法華經の御信仰も厚い院である。三寶への祈りをおろそかにされなかつた。それぞれその道の名僧についてますます御蘊蓄を積まれ、御淨行を怠らせなかつた。

出羽前司清房が行在に參候した時のことである。彼は學才振つて佛法を得意の辨舌で進講申し上げたが、法皇の御感を深くするに至

らなかつた。そののみか、院から不審と思はれる二三條を問はれると反答につまつて恐れ入り、却つて、院から實相眞如の理を語られると、博學と御造詣の深遠なのに舌を卷いて恐歎してしまつたのであつた。

法華經によつて後世を期せられ、現世の御不満を阿彌陀佛への御練行によつて捨て去らんと努力された院は、御側に、小厨子に納められた定朝作の阿彌陀三尊を安置され、その厨子の扉には、金泥を以て宸筆を染められ觀經の經文を書かれてゐた。日頃は、弘法大師筆の淨土三部經を御看經になつてゐた。お側に奉仕してゐた近臣も概ね落飾して、藤原能茂は西蓮、清寂、龜菊は歸本と稱して院の御勤行を助け奉つた。阿彌陀の三尊を文字にあそびして下賜されることもあつた。

明禪法却の念佛についての度々の奉答文によつて、院は一層御信念を深められ、御淨行を積まれた事であらう。

それにしても、折々には、かつての山城の水無瀬の離宮への華やかな御遊の日を偲ばれ、又、諸國へ遷られ給ふた上皇皇子の御身の上いかがと干々に御心を碎かれ給ふた事であらう。

が、悲しき報らせが島へ傳へられた。

御再會を冀せられた事も叶はず、安祿二年の秋、御母宮七條院の崩御を遙かに聞し召され、次いで寛喜三年、木枯吹きすさぶ多十一月には、土御門上皇の阿波に於ての登遐を知り給いて、つきぬ御な

げきにこの世の無常の御感を一入深くせられたことであつた。

今は何の御望も期し給ふの由なき悲しみとしたり給ひ、今昔の移り變りを偲ばれて、哀韻胸にせまる無常講式を作り給ふて御口ずさみされてゐたといふ。

後に、この講式は存覺法語に引用せられ、又、蓮如の有名な白骨の御文に轉用せられてゐる。

院は、遠島のつれづれなるままに十一面觀音像を刻まれた。これは、行く行くは都の近邊に安置せられて、民の幸多い正しい政治を祈り淨刹を興隆すべきことを希はれたものであつた。一千日の御持戒も清淨にされ、一刀三禮の報情で刻まれたものであつた。尙、深重の熱願をこめられるの余り、佛體の胸部とは二つの牙齒を納め給ひ、左右の佛手には、二つの小指を切つて納められたといふ。

かくて院は、承久討幕の企てられた聖業は事成らず、朝夕の御料にもことかくさまで、下賤の者すら余り味はないやうな艱難をなめさせられ、わびしい隠岐の小島にあぢきなき御半生を送り給いて、つひに都への還幸の御望も空しく絶えて、十九年の歳月を経て延應元年二月二十二日、おいたましくも遠島の假御所に於て、御壽算六十を以て崩御された。これを傳へ聞いた朝野の驚愕は、何物にも比量し難いものであつた。萬民哀傷せぬものはなかつた。

天地も悲しむが如く島は闇き雲たれこめ、岸根打つ浪も怨むが如き響を傳へてゐた。

特價奉仕

一、寺院用佛具類一式

一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

團體宿泊御案内

一、當寺本堂庫裡再建完了しましたので五十名位までの團體宿泊を實費で引受ます。

東京都江東區深川三好町一ノ五區役所前

長專院不動寺

正 本 實 乘

電話深川(64)五八四八

施本に

浄土トラクト

B6版
十六頁

竹中信常著

正信へのみちびき

現下新興宗教の功罪を論じ
そのヒロボンの病根を鋭く批
判すると共に、正しい信仰の
あり方を適切に指導する。

藤井實應著

一枚起請文

法然上人の金信仰の結晶た
る一枚起請文をば、懇切に解
説せられてある。

法然上人讃仰會編

信徒必携

信者として之だけは心得お
くべきことがらが、教義から
行事作法に到るまで明示され
ている。

定價一部十圓、○十部以上八
圓、送料十部毎八圓増○五
十部以上七圓、送料五十圓
○百部以上送料當方負擔

芝園だより

て種々宗教文化活動に活躍、「善き
光」の編輯長です。

○紅の櫻は過ぎて、新緑に移つて
いく。この五月號を期して、編輯
人、發行人、發行所々在地が下の
奥附の如くそれ／＼異動しまし
た。勿論會そのものには全く變り
ありません。

○吉田絃二郎先生は御病氣の所、
幸、間もなく御退院、御回復に向
われつゝあります。その中から本
號へ相不變玉文を頂き、恐縮して
おります。

○本號より佐藤賢順先生の異色あ
る親切な宗教入門が五回に渡つて
連載されます。

○毎日新聞社の山崎安雄氏は、エ
ミーよ等の著述で御存じの方も多
いと思われませんが、同出版局にあ
つていろ／＼出版の指導をされる
一方、本號にあるような社會問題
に人知れず頭をいためてかけづり
廻つておられる方です。お忙しい
所、特に原稿を頂き、感謝致しま
す。丸山剛水師は長野善光寺に於

○六月號には、世にある佛教信仰
の姿の實際のお話を、現在そうい
つた面と接觸指導をなさつておら
れる戸松學瑛、野々村學念、白幡
靜憲、吉原自覺、佐山學順、眞野
孝信、江口一定、山田鏡瑞、谷部
禪雄、辻昌瑞の各上人より、承わ
る事となりました。自己を宣傳す
る事の少ない佛教者が、少しでも
この機會に世に顯れて導きとなれ
ば幸と思う。

○五月十二日夕、銀座三笠會館で
佐藤密雄先生の正大佛教學主任就
任を祝う會が催された。

○六月の知恩院夏安居には、全淨
土宗の教學大會が開かれ、東西よ
り十名づつの研究發表が行われ
る。久しぶりに全淨土宗學會關係
者が一堂に揃うて、盛會が豫想さ
れる。

○芝學園校長中島眞孝先生は多年
の教育界の功により、此度藍綬褒
章を受けられた。
(眞野龍海)

會費(誌代)

半年二〇〇圓・一年四〇〇
圓です。前金切の節は、精算
通知を致しますから、折返し
御送金下さい。御送金は便利
で安全確實な振替を利用して
下さい、千圓まで二五圓の手
數料で且、通信も書けます。
新しい市は必ず縣名を、又、
新規か繼續會員かを明記して
下さい。

「浄土」五月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十年四月廿五日印刷
昭和三十年五月廿五日發行

(定價三十圓)

編輯人 竹 中 信 常

發行人 佐 藤 密 雄

印刷人 春山治部左衛門

東京都千代田區神田保町三ノ

印刷所 共立社印刷所

東京都品川區上大崎一ノ七八二

發行所 法然上人讃仰會

振替東京八二一八七番

生活と文化を結ぶ

松坂屋



本社 名古屋市中區南大津通り

☆各店所在地☆

東京（上野・銀座）

静岡・名古屋・大阪

（五月より若干定價が變ります）

銀ブランコ2人乗	¥ 12,000
銀ブランコ3人乗	¥ 14,000
銀ブランコ4人乗	¥ 22,000
銀ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
復式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達實費（都内横濱 500 圓以内
其他 1000 圓以内）組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、（荷造費當社・送料着拂）
組立説明書送付



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町 7 1 8
電(75) 1024（池上驛東3分）

幼稚園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのモ
ットで、堅牢安全な遊具を納入好評を頂いております。松管
・光明・芝・明照等の淨土宗幼稚園採用。